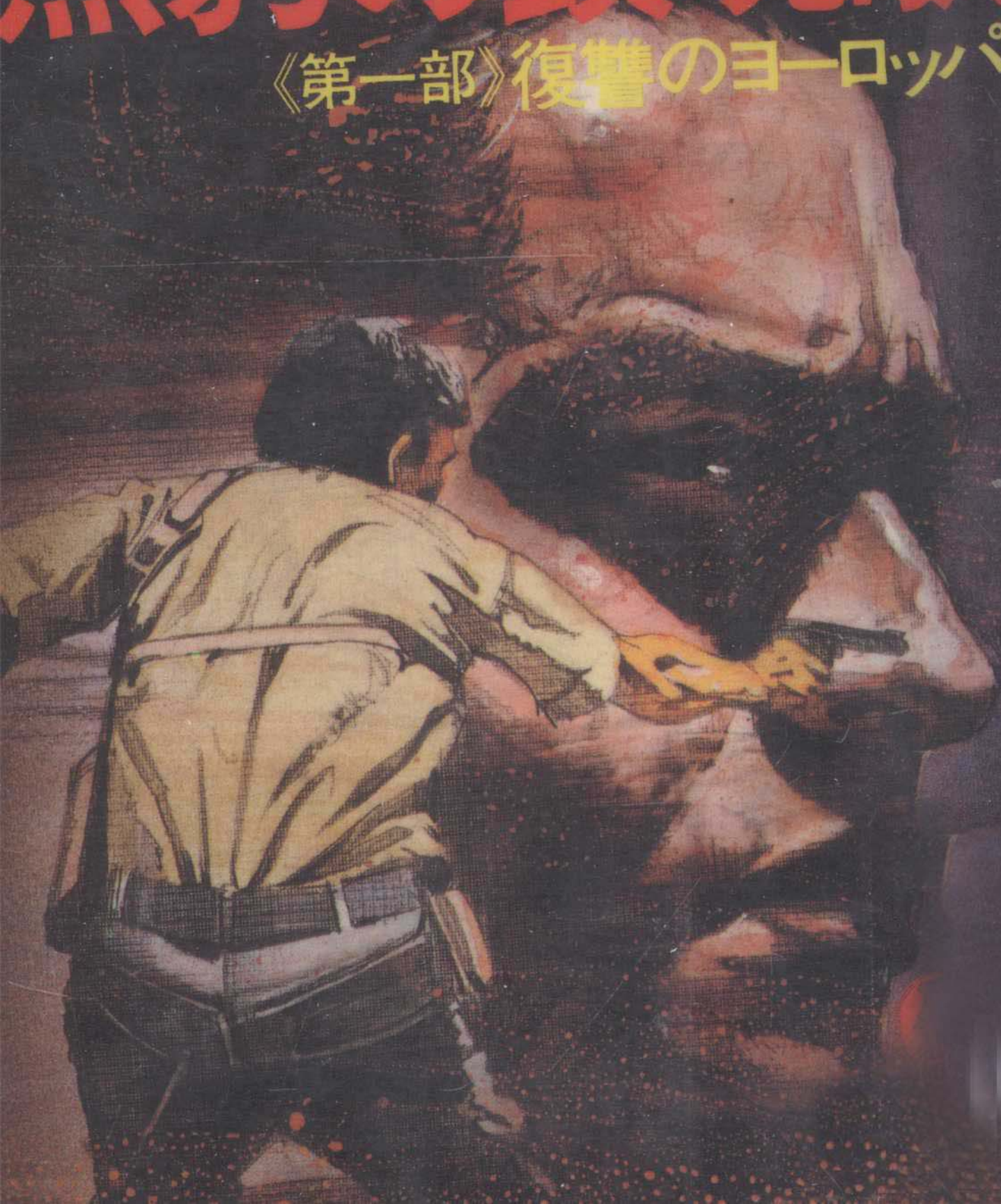


彦春數大

歌魂鎮の豹黒

《第一部》ヨーロッパの復讐



徳間文庫



くろひよう ちんこん か
黒豹の鎮魂歌

《第一部》復讐のヨーロッパ

© 1980 Haruhiko Ôyabu

302-1

1980年10月31日 初刷

著者 大藪 春彦

発行者 徳間 康快

東京都港区新橋四一〇番一〇五

発行所 株式会社 徳間書店

電話(〇三)四三三・六二三一(大代)

振替 東京四一四四三九二番

印刷

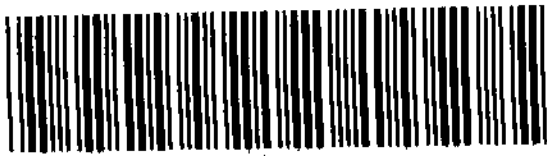
凸版印刷株式会社

製本

編集担当 前島不二雄

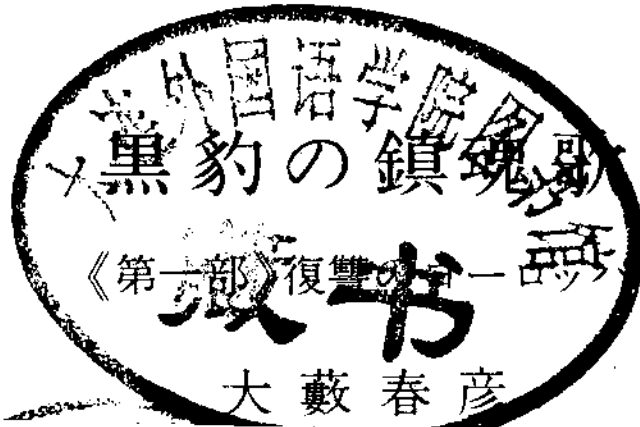
0193-587102-5229 (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

234136



日文 701723613

徳間文庫



日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

徳間書店

目次

海を穢けがす者

5

復讐の第一歩

30

パリ

54

オージー・パーティー

75

ブラック・ミサ

97

刺客

117

再びアムスで

136

断崖

156

祈り

176

大藪春彦年譜

195

海を穢^{けが}す者

1

運河とエロスの街、オランダのアムステルダムに、日本商工会館がある。

元首相の沖と、沖の一の子分で、次期首班の椅子を狙っている富田大蔵大臣が、財界から金を集めて作ったものだ。

その会館の表向きの顔は、オランダに日本の産業の実力を知ってもらうための民間PR施設だ。しかし、裏に三つの役割を持っており、そのほうが本命だ。

第一は、沖―富田派の資金ルートの海外拠点の役割である。たとえば、次期^{エフ・エツクス}戦闘機をファントムに決めるために沖―富田派が果たした功績に対して十億円のリベートが支払われたが、それはドルで日本商工会館の館長であり、沖の第二秘書であり代理人である川上に支払われた。

日本国内の財界から政治献金という名目で湯水のように入ってくる賄賂^{わいろ}の五分の一は、ユダヤ系の銀行を通じてアムステルダムの日本商工会館に送られ、そこで川上の手によって、スウイスの銀行に信託されたり、ヨーロッパやアメリカの成長企業に投資されたりしている。

無論、日本に革命が起こったり、北からの侵略で体制が引っくり返されたりしたときにそなえてだ。それと第二の役割にもその金は使われる。

第二の役割は、陰の大使館としてのものだ。沖や富田にかぎらず沖―富田派の政財界人は、ヨーロッパに旅行したときはそのアムステルダム日本商工会館に寄ってドルを受取り、女や宝石や投資用の絵画を買いあさるのだ。

絵と言え、沖が買うときには、画廊に行くと、並べられている絵の左端と右端を示し、「あそこからあそこまで買う」と言っている。

第三の役割は、小さなことだが、川上個人の財産の確保と蓄積の機能であり、年間一億円以上の金を、沖―富田派の資金から横領していることは、口止め料がわりとして黙認されている。

新城彰しんじょうあきらは、ローマ、パリ、ロンドン、ハンブルク、ストックホルムとガイドしてきた日本の流行作家が帰国するのを、アムステルダム空港で見送ると、予約しておいた市内フェルドナンド・ストライトの格式高いレストラン、ディッカー&ティースに向かった。エイヴィスから借りたレンタ・カーのプジョー四〇四を、自転車だらけの狭い道を巧みに走らせる。

長いヨーロッパの生活のせいもあって、長身の新城の顔つきは、雰囲気と同様に日本人ばなれしていた。年は三十三歳。激しく迫った眉と奥深い瞳が印象的だ。

頭に手榴弾しゅりゅうだんの破片をくらって三年前に退役するまで、新城は四年間のあいだ、フランス軍秘密部隊に傭やとわれて、コルシカ島で対ゲリラ要員として働かされていたのだ。交戦で数えきれないほど

死地をくぐった。

そして今は、日本から来た金持ちの観光客に、普通の観光コースでは絶対に味わうことが出来ない、ヨーロッパの秘密の快楽を体験させてやる一匹狼の高級ガイドとして生きているのだ。

かつての対ゲリラ秘密要員時代の同僚や上官や部下たちは、それぞれがさまざまな国籍や階級社会の出身であった。だから彼等を通じて紹介された快楽の秘密ルートが、今では新城のメシのタネになっているわけだ。

新城に案内された連中は、帰国してから口コミで宣伝してくれる……と言うより、異様な体験を自慢したい気持ちを押えることが出来ないから、パリとローマの一流ホテルの世話係コンセルジュを買収して連絡係りにしている新城は、時として好条件の客でも断わらねばならぬほど商売繁盛だ。

新城の実家は千葉の君津浜きみづはまで漁業をやっていた。ノリとアサリと雑魚ざこを相手の零細漁業だ。だが、毎日の暮しに困るというほどではなく、豊かな海からの恵みで、新城が東京の大学を卒業できたほどだ。

しかし、昭和二十八年の川鉄千葉製鉄所の進出をキッカケとし、京葉工業地帯けいようへの巨大企業の進出は、三十二年に三矢不動産が県に替わって埋立て工事費や漁業補償金を立替え払いする協定が出来てから、急ピッチとなった。漁民の海は次々に大企業に奪われていった。政財界に思いのままに動かされる県は、漁民たちに高圧的な態度でのぞんだ。

昭和三十六年、マンモス企業九州製鉄も、どんなに公害を出しても県も町も文句を言わぬ京葉工業地帯に進出することを決めた。

狙われたのは、新城の実家がある君津地方であった。当時大学を卒業した新城は、丸の内にある

海外旅行案内社の社員として、団体客に添乗^{てんじよう}して、アメリカや東南アジアやヨーロッパの観光コースを案内するのが仕事であった。

九州製鉄が君津に東洋一の製鉄所を建設するためには、社員住宅を含めて、莫大な土地を必要とした。

当然ながら、漁民たちから海を奪って埋立て、農民たちから畠を奪って盛土したり山を奪って切崩す。

漁業補償は、県や企業と漁業組合が取決める。だから、漁業補償金は組合に対して支払われるものであって、その配分は組合のボスに任されているわけだ。

新城の家が加入していた漁業組合の会長は、熱海に本拠を持つ広域組織暴力団銀城会の千葉支部最高幹部の一人であり、県会議員で県会土木常任委員もしていた小野徳三―小野徳一^{おののどく}であった。

貧しい古物商のセガレとして生まれた小野徳は、博徒時代^{ばくと}に漁業権を手に入れると、年によって出来不出来の差が大きく投機性のはなはだしいノリ養殖の漁民たちに高利の金を貸しつけて荒稼ぎすると共に、彼等を賭場^{とば}に引きずりこんでさらに財を増やし、町会議員を振りだしに利権あさりで得た金を政界にばらまいて、当時でも県会の実力者にのしあがっていたのだ。

小野徳は、九州製鉄君津製鉄所の従業員用食堂の経営を彼の一手に任されるという利権と引替えに、漁業組合の補償を法外に安く九鉄と県とのあいだで決めた。

組合員の大半は反対したが、小野徳には銀城会の暴力というバックがついていた。しかも、組合員には小野徳から借金している者が少なくなかった。小野徳から、今後は九鉄の守衛や食堂の従業員として傭^よってやるという約束をとりつけた、と言われると、反対の声は鎮^{しず}まった。

漁業補償金は普通一割から二割が現金で入り、あとは保証書や公債で渡される。新城の家に入つたノリとアサリの漁業権放棄に対する補償金はたった百万であった。

千葉の漁民はバクチ好きだ。金が無くなれば海で働けば何とかなるといふ気があるからだ。新城の父も例外ではなかった。

新城の父は二十万の一時金の現ナマを握つたあと、ほかの組合員たちと一緒に、バスで白浜の旅館に招待された。

酒と女があてがわれ、翌朝から賭場がたつた。見ているだけでは我慢出来なくなつた父は、二十万の現ナマを元手にバクチに加わつた。

夜までに百万を稼いだ父は熱くなつた。気がついたときには保証書を担保として捲きあげられただけでなく、さらに三百万の借金を背負つていた。

組合員のなかにも、新城の父と同じような目に会つた者が少なくなかつた。

だが彼等には君津浜に共同で持つてゐる漁具や漁船置場の土地二万坪ほどが残つていた。ノリやアサリなどの漁業権は放棄したが、雑魚ざこの漁業権はまだ放棄したわけではないから、彼等はその土地を出来るだけ高く九州製鉄に売りつけようとした。

千葉の場合の企業用土地の埋立て事業は、いわゆる千葉方式という予納金方式で行なわれる。

つまり土地代金は埋立て事業費に漁業補償金を加えたものを県が進出企業に先払いさせておき、その金で県が埋立てを行なつて、造りあげた土地を企業に引渡すわけだ。

しかし、埋立て予定地が決まつても企業の進出が決まらないときには、予納金が入らずに県の財政ではまかないきれないわけだ。

そんな時には、京葉工業地帯の最初の計画である五井・市原地区埋立て地帯の工費を立替え払いして以来、京葉工業地帯の造成で荒稼ぎしている日本三大財閥の一つ三矢グループのなかの三矢不動産が立替え、実費で土地を手に入れて、あとで進出してくる企業に大きな利ザヤをとって売りつける。

だが君津地区の場合には九州製鉄の進出が決まっているから、新城の父たちが共有している漁船や漁具置場の土地の買収交渉は九鉄自体が行なった。

九鉄はまたも法外な安値をつけてきた。新城の父たちが、ふぎけるな、と怒ると、

「どうぞ、ご自由に。売ってもらえなくても結構です。ですがね、共有地のまわりの海の埋立て権はうちのものですからね。まわりを埋められて、どうやって船を出し入れするんです？」

と、九鉄の庶務課の用地係長の岸村はせせら笑ったのだ。

2

結局、その共有地は時価の半値で買い叩かれた。

その金を、土地を共有していた百人の仲間に分けると、新城の父は小野徳に借りたバクチの借金を返し切ることも出来なかった。

父はあせってますますバクチに溺れ、ついに小野徳からの借金が一千万を越えたとき、妻と新城の二人の妹を道連れにして猟銃自殺をしてしまった。

小野徳は、銀城会の若い衆を引連れて通夜に戻っている新城彰のところに押しかけ、父の借金の

証文を振りまわしながら、

「これをどうしてくれる？ 金を返さない、とは言わせないぜ」

と、凄んだ。

「父の借金を俺が返す義務は無い。それに、バクチの借金は法律で返さないでいいことになってる」

新城は小野徳を睨み返した。

「何を生意気なことを抜かしてやがるんだ。おい、若造、この証文のどこに、バクチの借金だと書いてある？ どうだ？ 貴様のオヤジはな、どこかの女に狂ったんだろう。俺のところは毎日のように泣きついてくるんで、可哀そうに思っただけで貸してやったんだ。さあ、返せ。一度に全部とは言わん。月賦で返すと証文を書いてもらおう」

小野徳は迫った。

「断わる。帰ってくれ。しつこくつきまとうと、警察に訴える」

新城は叫んだ。

「馬鹿。俺を誰だと思っているんだ。俺にはな、通産大臣から大蔵大臣になられた親分の富田先生、保守党幹事長の水木先生、それにもと首相の沖先生というバックがついているんだ。九鉄も三矢不動産も俺を可愛がってくれている。それに、俺はいつまでも県会あたりでくすぶっている男じゃねえ。今に代議士様になる身だ。県警ごときが俺に手出しが出来るもんか。貴様、俺を舐めるんじゃないぜ」

小野徳は残忍な表情で歯を剥いた。

「一丁、可愛がつてやりますか先生」

銀城会の男たちのうち代貸し格の安西というものが、サディスティックな笑いと共に言った。

小野徳はニヤニヤ笑った。

銀城会の男たちは一斉に襲ってきた。

新城は三人までは叩き伏せたが、多勢に押えつけられ、半死半生の目に会わされた。一週間後、やっと歩けるようになった新城は警察に被害届を出したが、果たして何の捜査も行なわれなかった。新城が会社に出ると、会社に銀城会の連中が押しかけてきて借金の返済を迫った。

新城の能力を高く買っていた会社は、新城をパリの支社付けにしてくれた。これでやっと新城は小野徳の手から逃れることが出来たが、その二年後、再び新城の運命を変える事件が起こった。

一家の命を奪った連中への復讐の念を絶やさなかった新城は、パリで生活するようになってから、暇さえあれば射撃場とボクシング・ジムと中国系フランス人がコーチする拳法の道場、それにアラブのナイフ使いのジムにかよって腕を磨^{みが}いていた。

だから、日本人の旅行客五、六人を夜のパリに案内していたとき、パン助宿でジゴロと争った客を助けようとして、ナイフを抜いて襲いかかってきたジゴロを手刀の一撃で殴り殺してしまったのだ。

フランスの警察に逮捕された新城は、フランス領ギアナの鉱山で二十年の強制労働に服するか、それともコルシカ島で対ゲリラ要員として働くか……の選択を迫られた。

新城は後者を^{えら}んだ。

フランス領コルシカ島は、ナポレオンの生地として名高いが、地理的にはフランスから遠くイタ

リーに近い。

かつてはイタリー領であったその島は、ブドウ酒とオリーブがとれるが、ほとんどが山地で牧畜で生計をたてている者が多い。

住民たちの生活は苦しく、離島しない者の多くも、フランス政府を憎むようになっている。

したがって、ゲリラ活動は激しかった。役所や軍隊に攻撃を掛けたゲリラは山のなかに逃げこんでは、次には思いがけぬ場所に出てきてゲリラ活動をくり返すのだ。

そのゲリラ団体は、イタリー復帰同盟という名であった。軍隊の前では何食わぬ顔をしている農民や牧夫が、夜になると、隠してあった武器を掘り出してきてヴェトコンのように戦う。

それにコルシカには昔からペンデッタといって、肉親が殺されたら、あくまでも仇敵^{かたき}をつけ狙うというシキタリがある。あまりに貧しいから、命がけで誰かを憎んでいないことには、生きる甲斐がないのかも知れない。

そうでなくても、貧しいのに誇りばかり高くて、侮辱されたと感じるとすぐにナイフを振りまわす土地柄だ。いや、貧しすぎて、誇りという支えがないことには生きていけないのかも知れない。

新城が編入させられた秘密憲兵隊は、一九六二年にアルジェリアが独立を勝ち取ると共に表向きは解体された外人部隊に替わるものであった。

ちがうところは、隠密行動をとることと、フランス人でも入隊できることだ。五年のあいだ任務に忠実であったら、隊員が入隊前に犯した法律上の罪は特赦され、除隊の自由も与えられる。

アフリカにあるフランス領ソマリで半年の特殊訓練を受けた新城は、コルシカの首都アジャクシオ郊外の日本製バイク屋の小さな店を表看板に持ち、仲間たちと連絡をとりながら対ゲリラ活動に

従事した。

ゲリラをひそかに殺すとき、新城は激しい胸の痛みを感じたが、それもはじめのうちだけであった。同情していたら、こっちが殺られるのだ。

あるときは、拷問をうけて新城の身許をしゃべりそうになった同僚の言葉を盗聴器で聞いて、千メートルの遠距離からライフルで狙撃して口を封じたこともあるし、山に逃げたゲリラを深追いで、マキと呼ばれる低木地帯でゲリラ十数名の待伏せに会って腰が抜ける思いをしたこともある。

そして新城は三年前、とうとうゲリラたちに正体を知られて店を取りまかれた。自動銃の銃身が熱で曲がるほど射ちまくって防戦したが、放りこまれた手榴弾の破片を幾つも頭に受けて意識が遠のいていった。

正規軍が援けにきてくれなかったら、新城は捕えられてなぶり殺しにされていたことであろう。パリの病院に空輸された新城は大手術を受けて命をとりとめたが、脳にくいこんだ手榴弾の破片のうちの一つは、それをとりだす手術を行えば脳自体が目茶苦茶になってしまう怖れがあるので、脳内に残されたままになった。

ゲリラに正体を知られた新城はもうコルシカに戻っても政府のための役にたたない。それに、重傷を負った身であるし……という事で、二カ月後に退院すると共に、まだ五年の満期が終了するまでに一年近くあったが、除隊を許された。

フランスの永住権も与えられた新城は、しばらくは軍から与えられた見舞金で食いつなぎ、そのあとはガイドをやって食っているのだ。

脳に残された手榴弾の破片はときどき位置を変え、そのたびに新城はベッドで転げまわりながら、

狂暴な発作に見舞われた。

そんなとき新城は、日本に帰り、小野徳をはじめとする、父や母や妹たちを死に追いこんだ連中をなぶり殺しにする夢を見た。

だが夢はまだ実現していない。今の気楽な生活を捨てて、再び暴力のジャングルに戻っていく決心がなかなかつかないのだ。

小野徳が先の衆議院選で二億円を越す金をバラまき、また銀城会に有権者を脅迫させて、直接親分の水木さえも押え、千葉某区でトップで当選したということは、風の便りに新城は聞いた。

選挙が終わってみると、小野徳派の選挙違反は厖大ぼうだいなものであったという。全国第三位という違反のなかでも、県全体の逮捕者三十五人中の十四人、任意取調べ六百二十二人中の二百三十人が小野徳派であり、一票五千円で小野徳は票を買ったことも判明した。

だが、地元民も怪しむほど、調べは途中で打切られた。

沖―富田派につながっている小野徳のことであるから現在の権力機構社会では不思議なことではない。千葉のケネディと自称する小野徳は、警察の存在などまったく無視し、無法地帯のようななかを肩で風を切つて闊歩かつぽしているのだ。今は、ぬけぬけと、千葉県公害対策特別委員長を兼職している。

だが、それには、千葉でも銚子地方を選挙地盤とし、現在は保守党副総裁を勤め、やはり富田や東北出身の水木幹事長と同様次期保守党総裁、すなわち首相の椅子を狙っている藪川と、沖―富田派とのパワー・バランスを保つための取引が小野徳に有利に働いた、ということも言えるらしい。新城の実家が海を奪われた頃の県警本部長は藪川の子分の山部元次郎であった。